

しかしながら、鯖石川は柏崎平野の水田を潤す恩恵の川でもあります。先人は、洪水災害に悩まされながらも、川の恩恵を享受してきました。その史実は定かではありませんが、古くは1186（文治2）年に鯖石川の治水がはかられたとする記録もあります。その後も、治水の努力を試みたようですが、現代になるまで、自然の猛威には逆らえなかったようです。

水路の底からは、木札が出土しました。現在のところ文字を確認できておらず目的は定かではありませんが、治水の願いを捧げたのかもしれない。



水路の底から出土した木札

5 水田の開発・放棄と再開発

宝田遺跡の水田遺構は、室町時代を最後に途絶えることがわかりました。遺構の上には厚い洪水堆積物（砂）が確認され、その間に耕作の痕跡を確認することはできません。また、イネのガラス組織（プラント・オパール）も検出されておらず、一定期間、遺跡周辺で水田が再開発されることはなかったようです。

遺跡周辺の水田の主な地籍は、「春日」と「橋場」です。中でも橋場の水田開発は、他地域から遅れたとされており、8割の水田が17世紀後半～18世紀前半ころの100年に満たない期間で開発されたと記録されています。遺跡は柏崎平野のほぼ中央に位置することから、集落から最も遠く、開拓も困難な地域であったことが推察されます。周辺の水田の再開発が遅れた要因のひとつは、そのような地理的背景があると考えられます。



50 μm

プラント・オパール

今回の発掘調査成果と古文書の記録を総合すると、遺跡周辺における水田の開発史は次のように復元できます。

9世紀後半 はじめて水田開発される。

13～16世紀 継続的に水田耕作が行われる。水路の整備などが本格的に行われる。

16世紀前後 水田が洪水によって壊滅。水田を放棄。

《100～200年間 耕作が行われず。》

17世紀後半～18世紀前半 水田の再開発が行われる。この水田が、現在の水田の基本的なかたちとなる。

また、江戸時代後期（18世紀末～19世紀）の陶磁器が出土する水路を検出しました。この水路は、昭和20年の地図に掲載されており、土地改良が行われる以前まで使われていた重要な水路であったと考えられます。この水路がいつ、掘られたのかは明らかではありませんが、江戸時代後期の陶磁器は水路の底に近いところから出土しており、それ以前のものといえます。耕作が行われなかった空白期間を考慮すると、17世紀後半～18世紀前半に水田の再開発がなされたのであれば、その時期に掘られた水路である可能性が高いと考えられます。



水路跡から出土した
江戸時代後期の遺物

土地改良以前（昭和20年）の地形図と宝田遺跡の位置 『土と水と光 北鯖石郷土誌』より